くろしろ

八尾利之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
くろしろ

【Ｎコード】
Ｎ２４２７Ｆ

【作者名】
八尾利之

【あらすじ】
都会っ子の怜は、夏休みにはじめて祖母の家へと預けられた。どこにいても孤独だった怜は、山に囲まれた見知らぬ土地で犬のシロ、妖怪のクロと出会う。ひとりぼっちだった怜の心は氷解していき、徐々に笑顔を取り戻していくのだが……。

1

軽の車は未舗装の道路を苦しみながら上っていた。山の表面をジグザグに刻んだ道路は、工事の途中で放置されたという感じだった。転落防止のガードレールはごつくて立派だったが、どれも錆ついていて、叩けばたちまち粉々になるのではないかと不安になる。

窓から眺める光景はつまらなかった。延々と木が並んでいるだけで、たまに切れ目からわずかに下界が見えてハッとさせる程度でしかない。

怜はこれほどラジオに耳を傾けたことはなかった。目で楽しめないなら、耳で楽しむしかない。しかし山ではＦＭは入らずＡＭだけで、どこか古臭く、内容も興味はひかれなかった。

「もう少しで着くからね」

母親の声は疲れているようだった。ペーパードライバーの母親は、レンタカーを二時間も運転し続けているのだ。怜も疲れていた。車に揺られ続けているせいもあったが、母親の隣りにこれほど長く居続けていることが大きい。

最初こそ母親は怜に様々などうでもいいことを聞いてきたが、三十分もしないうちに話題が尽きた。

怜は母親が嫌いなわけではない。ただ苦手なのだった。朝から晩まで仕事をしている母親を正面から見た記憶は少なく、背中か横顔ばかりを見ていた気がする。怜が起きるのとほぼ同時に仕事へ出て行く母親を見送ったあと、作り置きされていた朝食を食べて食器を洗い、洗濯物を干してから学校に行くのが日課となっていた。そして帰ってくる頃には母親は次の仕事に行っているか、明日に備えて眠っている。休日では顔を合わせる機会も多いが、そうすると怜は居心地の悪さを感じて遊びに行ってしまう。夕方まで蟻の行列を眺めていたこともあった。

そんな関係であったから、無言でいることは苦ではなかった。

車はいよいよ山の谷間へ差し掛かり、緩い下りを降りはじめていた。

夏休みに入った怜が母親の実家に行くことになったのは、祖母に孫の顔を見せたいからとかそんなことはなく、単純に母親の仕事の関係であることを怜は理解していた。毎年夏休みがくるたびに、母親の表面に押し隠した疲れが出ていることにはやくから気がついていた。最初の数年は頑張っていたが、やはり耐えられなかったのか、小学四年の夏休み、つまり今、実家に預けることとなった。

「怜が小さい頃、何回か来たことがあるのよ。覚えてる？」

と母親に聞かれたが、まったく記憶にない。山はどれも同じに見えるし、谷間に見え隠れする段々畑は一瞬目を引いただけで、すぐに飽きてしまっていたから、思い出に引っ掛かるようなものはなかった。

村は完全な田舎からは脱却していたが、怜の慣れ親しんだ時間軸とは違っていた。山に囲まれた盆地には住宅地があり、中心部に向かうにつれて道路もアスファルトへと変わっていった。軽自動車は元気を取り戻した。

「もうすぐだからね」

人気のない狭い道路で、母親は神経質に左右を見回しながら慎重にハンドルを切った。T字路に差し掛かり、突き当たりには小山があって、正面に鳥居が見えた。鳥居の先には石造りの階段が真直ぐ斜面を上っていて、すぐ木々に隠されている。それを見た瞬間、怜の脳裏に見慣れぬ閃光が走った。はっきりと知覚する前に光は消え去り、あとには苦味にも似た感覚だけが残っていた。車は何事もなく鳥居の前を通過して、そこからわずかに先へ進んだところで停車した。

「ここ？」

窓越しに見てみると、住宅地でよく見るありふれた門があった。その奥にはくたびれた日本家屋が伸びている。

「うん。覚えてない？」

「ないよ」
マンションに住んでいる怜にとって、平屋の家は新鮮だった。普段なら意識もなく通り過ぎていた住宅地の家から、突然生気を押しつけられたような気分だった。
怜は抱き抱えていたリュックサックを持って車を出ると、母親のあとについて玄関へと向かった。母親がなんの予告もなく突然戸を開け、当たり前のように中へと入っていくのを見て怜はギョッとした。
「ただいまー」
母親は奥へと続く廊下に向かって声を張り上げた。そして玄関前で立ち尽くしている怜を振り返って手招きをした。
「なにしてるの。はやく入りなさい」
怜はもじもじしてから中に入った。後ろ手に戸を閉めると、ほぼ同時に奥から白い犬が顔を出した。
「ほら、怜、シロよ」
母親は少女のように微笑んで、シロ、シロと呼び掛けた。犬は億劫そうにのっそりと廊下に全身を出した。それは全身白毛に覆われており、大きさは怜ほどはあった。シロは訪問者になんの興味も示さずにゆっくりと近付くと、おとなしく母親に頭をなでられた。怜は犬のあまりの大きさにうろたえた。マンションではペットを買ったことがない。動物に触るという経験自体が少なかった。
「ほら、怜も触ってあげなさい」
怜はリュックサックを抱き締めると後退りした。
「僕は、いいよ」
「大丈夫よ。怖くないから。こんなおとなしいんだから」
と言うと、母親はシロの前脚のわきに手を入れると、うんと言って持ち上げた。シロはバンザイをした格好で二本立ちにされたが、まったく抵抗する素振りも見せなかった。しかし立ち上がったシロは怜の二倍は大きく見えて、余計に恐ろしく感じられた。
怜は首を振って、さらにあとずさった。もう後ろには後退するス

ペースは残されていなかった。
「あら」
奥から枯れ木がすれるような物音がしたかと思うと、廊下に現われたのは老婆であった。杖をつき、腰が曲がっている。小太りであったため、曲がった腰もありボールのように見えた。ふっくらとした顔にはシワが垂れ下がり、目はほとんどシワに隠れている。
「もうついたの」
その老婆は怜に目を止めて、あらあらとシワの深みが増した。
「まあまあ、ずいぶん大きくなったこと」
老婆は小股でせかせかと廊下を進むと、靴を脱いで上がりはじめていた母親をねぎらったあと、我慢できないといった要素で怜をとっくりと眺めた。
「ほら、怜、お婆ちゃんよ。こんにちはは？」
母親にうながされて、怜はおずおずと頭を下げた。
「こんにちは……」
「遠いところよく来たねえ。さあ上がりなさい」
怜が母親に続いて上がると、すぐ左側にある居間へと通された。廊下は木張りだったが、居間は畳だった。椅子がない。祖母は古びた座布団を敷いてくれたが、綿がへたれてほとんど意味をなしていなかった。怜はどうやって座ればいいか考えあぐねて、結局足を伸ばして座った。
祖母が嬉しそうに居間を出ていくと、母親があれが祖母だと再び言った。
「覚えてる？」
怜は何回繰り返したかわからない問答に同じ答えを返した。母親以外に家族がいたという事実は驚きだった。
「夏休みはここでお世話になるんだからね」
「うん……」
部屋を見回すと、どこもかしこも古ぼけていた。なにか独特の、刺激臭を数百倍も薄めたような匂いがする。障子が開いて、盆を持

った祖母が戻ってくると、それにかぶさって線香の匂いがした。
「怜ちゃん、なにが食べたい？」
盆には缶ジュースと山盛りになったお菓子が積み重なっていた。
「お母さん」
と母親が厳しい声で言っても、祖母の深いシワに吸引されて、耳まで届いていないようだった。怜は母親の顔色を伺いながら、慎重にお菓子を――一番小さな袋だった――選び出し、ジュースも本当はサイダーがよかったが、果汁百％のオレンジジュースにした。母親はすばやく祖母の手から盆を引き継ぐと、怜の目に入らない脇に置いた。
「ちゃんとしてくれないと困ります」
母親は母親のような口調で祖母を叱咤すると、祖母は申し訳そうに頭を垂らした。白髪の中に、薄くなった頭皮がかすかに見え隠れした。
「怜、お母さんがいなくても、しっかりできるでしょ？」
怜は曖昧にうなずいた。しっかりできるかどうかより、他人と過ごさなければならないことに対する不安のほうが大きかった。
木目の浮き出た天井からは睨まれているような気がする。不自然にねじれた梁は今にも動きだしそうだった。畳のあちこちは黒く小さい焼け焦げが点々としている。そしてこの形容しがたい匂い。怜はここで見知らぬ人とすごさなければならないと考えただけで、泣き出したい衝動に囚われた。なにもかもが知らないものばかりだった。そして母親はすぐにでも帰ってしまうのだ。
「じゃあお墓に行こうか」
怜はドキリとした。墓参りもはじめてだった。昔は頻繁に行っていたそうだが、母親の仕事が忙しくなるにつれて頻度は減っていった。少なくとも怜の記憶には、墓参りをした覚えはない。
母親と祖母は桶やらひしゃくやらをいそいそと準備した。祖母はシロに綱をつけていた。
「それ、連れて行くの？」

祖母の背中に小さく声をかけると、祖母は振り返って目尻のシワを深めた。
「そうだよ。怜ちゃんはシロが怖いのかい？」
怜は小さくうなずいた。祖母はしばらくしてから、ふうんと息をはいた。
「そりゃまた、どうして？」
「大きいから……」
「大きい犬を見るのははじめてかい？」
怜は首を振った。
「テレビで見たことあるよ。でも、触ったことはない」
祖母の垂れたまぶたの奥から、瞳がチラリとのぞいた。
「触ってみるかい？」
「いい」
「怖いから？」
怜はうなずく。祖母は伏せているシロの頭をなでた。
「大丈夫だよ。お婆ちゃんがこうして――」
と言って、シロの首根っこを掴んだ。
「掴まえておくから、噛み付いたりしないよ。少し触ってごらん」
シロは寝ているのか、祖母に押さえ付けられて見るからに苦しそうにも関わらず微動だにしていない。怜はまだもじもじしていたが、祖母が再び促すと、じりじり生き物との距離を縮めて、手を伸ばした。そしてひたいをつついた。生き物に動きはなかった。死んでいるのではないか、と怜は一瞬思った。
「怜ちゃん、つついたら犬も痛いよ。頭をなでてあげるんだよ」
怜は恥ずかしさで頭が痛くなってきた。汗ばんだ握り拳を開いて、犬の額に手を乗せた。
「なで方、わかる？」
「わ、わかんない」
「怜ちゃんの頭をなでるみたいになでたらいいんだよ」
怜はなでられたことも誰かをなでたこともなかったが、風呂上が

りに頭を拭くときを想像しながらなでてみた。
「もう少し優しいほうが、シロも嬉しいんじゃないかな」
「こ、こう？」
「そうそう」
シロの毛は柔らかく、頭皮は熱かった。薄い皮膚を通して、血液が規則正しく流れていく振動が伝わってきた。
「お墓は遠いの？」
「歩いてすぐのところだよ。だから散歩のついでにシロを連れていくのさ。怜ちゃんが綱を持つかい？」
突然の申し出に、怜は戸惑った。
「暴れたり、しない？」
「しないよ。ねえ？」
祖母がシロに呼び掛けると、シロは答えるかのようにあくびをした。
「ほらね」
「暴れたりしないなら……」
「どれ。なら、行こうか」
ちょうど母親が準備を終えて顔を出したのを見て、祖母は倒れそうに立ち上がった。怜は綱の持ち方を教わり、その通りに握り締めた。待っていたかのようにシロはすっと立ち上がると、怜の左脇にぴたりとついた。それからは、怜がどんなにゆっくり歩こうと思い切り駆けようと、シロは完全に怜と同期してついてきた。怜はこの忠実な犬をいっぺんに気に入った。ごく稀に綱を引くときもあったが、それはトイレのときだけだった。怜は好奇心を秘めた瞳でそれをとくとくと眺めると、処理しようとする祖母に自ら名乗り出るほどになった。
墓は神社のほうにあるようだった。T字路が近付くにつれて不安がつのり、足が重くなった。そして鳥居が見えたとき、怜は思わず叫び出しそうになった。足にシロのぬくもりがなければ腰が抜けていたかもしれない。

鳥居の柱の影から、一対の光る目がこちらを見ていたのだった。そこだけ異様に影がわだかまっており、ただ光る二点だけが、台風の目のように影に空いた穴として見えた。
祖母が急いで寄ってきて、枝のような指先で怜のむきだしの腕を掴んだ。驚くほどの冷たさにはっとして見上げると、祖母は悲しそうにしていた。
「大丈夫だよ。あれが見えるんだね」
あれがなにを指すのかは明白だった。
「お婆ちゃんも見えるの？」
「見えるよ。だから心配しなくて大丈夫。ほら」
と鳥居に投げた視線を追うと、先にはなにもいなくなっていた。
「お婆ちゃんがやったの？」
「いや。あれは悪いものではないからね。怜ちゃんがびっくりしたのを見て逃げちゃったんだよ」
「悪者じゃないの？」
とてもそうとは思えなかった。
「お母さんが帰ったら、詳しく話してあげようね」
怜は様々な気持ちが脳裏をよぎり、全部を同時に言いたくなったが、口から出たのは一つだけであった。
「お母さんは、見えないんだ」
「そうだね」
祖母はそれだけ言うと、T字路を曲がりかけたところで待っている母親を見てから、さあ行こうと怜を励ました。
墓場は神社よりほど近くにある寺の一角にあった。墓場は小さく古びていたが、墓石は真新しい光沢を放っていた。
この石一つ一つの下に何体もの人間が埋まっているのだと思っても、怜には今一つピンとこない。石は石でしかなかった。ほかの石より凝っているという以上の感想は浮かばなかった。しかし墓石の脇に刻まれた父親の名前を目にすると、たちまち涙が止まらなくなった。父親は怜がずっと幼い頃になくなっていた。その姿はおぼろ

げで、どんな体格だったのか、どんな表情だったのかすらろくろく覚えていない。あるのは暖かさだけだった。父親を思いだそうとすると、不思議と背中が熱くなる。なぜなのかはわからない。

三人は墓石を研いたあと、線香を供えて手を合わせた。怜が薄目を明けて二人を見てみると、二人は目を閉じて動かなかった。母親は合わせた指が鼻にくっつくほど顔に近付けて、自分の手にもたれかかっているかのようだった。祖母の目からは涙が一滴滑り落ちていた。

儀式が終わると、三人は来た道を帰って行った。神社の前を通るときは、緊張こそしたものの何事もなかった。

怜は母親に、神社であったことを話さなかった。母親は細々としたことを祖母に言うと、困ったような顔で怜を見ながら「ごめんね」と言い、なにかあったら電話をするように言い残して帰っていった。

2

夕飯を作る祖母の物音を聞きながら、怜は見たこともないチャンネル数の番組を眺めていた。古いテレビの映りは悪く、出演者の身体が時々ゴムのようにグニャグニャと曲がりくねったので、そのときだけ怜の意識を引いた。

シロは居間で寝ていたと思ったら、廊下に出ていき玄関近くで横になったりしている。あんな頻繁に寝起きを繰り返して、ゆっくりと休めるのだろうかと怜は思った。

怜の住んでいた住宅地と比べると、ここはかなり涼しかった。開け放たれた窓からはゆるやかな風が引き込まれ、台所を回ってみそ汁の匂いと共に戻ってきた。夕日に照らされキラキラと光る宙に浮かぶチリが、くるくると渦をまいている。庭からは先走りした夜虫たちが鳴きはじめ、間近で聞いたことのない怜を不安にさせた。そういうときに父親のことを考えると、怜の不安は包み込まれて緩やかになるのだった。

暗闇がぶしつけな隣人のように居間に上がり込んで来た。怜が明りをつけると、電灯はじりじりと小さくわめきながらついた。家の光とは比べ物にならないほど頼りない。なにもかもが薄暗く、くすんで見えた。古いものはさらに古くなり、怜自身も突然年を取ったような気がした。

庭を怜の視力で見通すことができなくなり、虫のやかましい声でテレビが聞き取れなくなるくらいに夕食が出た。白米にみそ汁に、なぜかハンバーグだった。光のせいかそれらは味気無く見えたが、口に入れると意外にしっかりと味がついていた。テレビでは毎週見ているアニメがやっていたが、虫のせいでろくろく音も聞こえず、映りも悪く、みじめだった。怜はここは果たして日本なのだろうかと思った。

ぼそぼそと夕飯を食べ終わると、祖母は蚊取り線香を炊いて食器

を洗いに台所へむかっていった。怜は線香がゆっくりと燃焼していく様にひきつけられた。風がふくと外側が赤くなり、はやく燃える。しかし内側は遅く、徐々に先端は尖っていく。やがて内側も燃え尽きる頃には、自身の重みでぼそっと落ちるのだった。落ちた線香のカスをつついてみると、非常に細かい砂を押したときのようにつぶれた。

祖母がお茶とジュースを持って戻ってきた。

「さて、そろそろ話してあげようかね」

怜は顔を上げた。祖母は怜を見つめていた。

「神社の？」

静かにうなずく祖母はお茶をひとくちすすった。

「まず言っておくと、あれは悪者じゃあないのさ。私はあれをクロと呼んでるんだけどね」

「……生きてるの？」

祖母はニコリとした。

「それは大した問題じゃあないと思うよ。でも生き物ではないだろうね。クロはシロと仲がいいから、ここにもよく遊びにくる」

怜の表情が強張った。祖母はそれを見て取ると、瞳がシワに隠れてしまった。

「怖いのかい？」

その問いに怜は奇異な感じを受けたが、黙ってうなずいた。

「はじめて見るものはなんでも怖く思えるものさ。シロはまだ怖いかい？」

今度は首を横に振った。

「クロはシロのようなものだよ。犬よりは数が少ないから、見慣れるまで時間がかかるかもしれないけどね……」

そのときシロが居間に入ってきて、窓際へのっそりと歩み寄ると、網戸に爪をひっかけ、わずかに開けた。怜はぎょっとして、反射的に祖母の後ろへ回り込んだ。それはすでに窓際までやってきていたのだった。

「あれがクロだよ。真っ黒いからクロ」
クロの輪郭は闇に溶け込み、ぼやけていた。陽炎のように揺らめいているようにも見える。また分厚いのか、薄いのかもよくわからなかった。向こうの景色が見えそうでもある一方で、どっしりとした重量感もあった。
クロはひどく遅い動きで網戸の隙間から手を差し入れた。怜はその動きに引きつけられた。まるで熱い湯に入るかのようだ。家の境界線をくぐると、かすかに震えたのがわかった。熱さに慣れていないのか一度手を引っ込め、改めて差し入れてくる。手首まで入ると、あとは勢いだった。両腕が狭い隙間から入ると、畳をわしづかみにして身体を引き上げた。網戸のスペースを通り抜けるとき、クロの身体は縦に伸びて、天井近くにまで達した。波が崩れるように伸びた上部がまず落ちはじめ、下部はそれに引きずられて入り込んでくる。小さな黒い滝を見ているようだった。外部の闇が質量を持って居間に降り注ぎ、瞬く間にダルマのようなクロを形作った。
怜は祖母の背中を掴んだまま惚けていた。
「怜ちゃん、挨拶をしてあげなきゃ」
言われるがまま、怜は祖母の肩越しに頭を下げた。
「こんばんは……」
すると向こうも頭を下げた。
「言葉がわかるの？」
「そりゃ、クロだもの」
祖母が嬉しそうに言うと、シロが鼻を鳴らした。
「しゃべれないの？」
「そうみたいだね」
「なにを食べるの？」
「聞いてみたらいいんじゃないかな」
怜は祖母の肩からクロの輝く目を眺めながら訪ねた。
「クロ、なにを食べるの？」
クロは音を立てずに網戸の外に手を伸ばした。そしてなにかをぐ

っと掴むと、引っ張った。とたんに外の影が餅のように伸びた。さらに強く引くと、伸びた部分がぷつりと切れて収縮し、クロの手には野球ボール大の影が残っていた。クロの目の少し下が横に裂け、身体に不釣り合いな口が開く。口の中には舌も歯もなく、ただ赤い空間が広がっていた。そこに影を持った手を入れると、手ごと食べた。しかし手はモグモグと口を動かしているうちに復活していた。

「お婆ちゃん！　食べたよ！」

「すごいねえ」

　怜は間近でクロの様子を観察した。クロは時々まばたきをしているのか、黒鉛に浮かぶ一番星のようにまたたく。その瞳の外円部分には、人の眼のように明確な境界線はなく、小さな炎のように揺らめいて、光と闇が混ざりあっていた。稀に闇の一部分が光の真ん中近くまで入り込んでしまうこともあった。するとクロは何度もまばたいて、手でゴシゴシとこすることもあった。

「お婆ちゃん、触ってみてもいい？」

　振り返って尋ねる怜に、祖母は肩をすくめた。

「クロに聞いてみたらいいんじゃないかな」

「どうやって聞けばいいの？」

「さっき聞いたみたいに。友達になりたいなら、握手をしたらいいんじゃないかな」

　握手という行動が頭に浮かぶまで、怜はしばらく考えなければならなかった。彼は今まで握手をしたことがなかったのだった。

「握手って、どうするの？」

　祖母は微笑みを浮かべて怜の手を取ると、右手をしっかりと握り締めた。冷たく骨の硬さがにじみでた手は、怜の体内を暖かにした。

「これで、怜ちゃんとお婆ちゃんも友達ね」

「うん」

「同じことを、クロにもしてあげて」

　怜はうなずいて、クロににじり寄った。クロは怜のしたいことを察して、さっそく腕を持ち上げた――持ち上げてくれないと、身体

と腕が同化してしまい、怜には見分けがつかなくなってしまうのだ――。怜はその手を右手で握り締めた。紙のようにペラペラで、恐ろしく濃度の高い霧を掴んだようだった。力を入れると、掴んでいる部分がひしゃげて、指の隙間から溢れそうになる。慌てて怜は力を緩めた。意外にも、クロは冷たくなかった。しかし温かくもない。意識しなければ、握っていることを忘れそうなほど希薄なだけだった。

「これで友達」

怜がつぶやくと、クロは光を一際輝かせた。怜はこの未知の生き物と友人になれたことを考えて、頭がほてった。くらくらして倒れそうになった。あの大きな口で噛みつかれるのではないかという思いがよぎったが、そうしたいとしても、祖母の前ではできないという確信じみたものがあった。

あるいは、もしかしたら本当にクロはおとなしい生き物――生きているか定かではないが――なのかもしれない。しかしそうだとしても、あの大きな口は怜を少なからず不安にさせた。一掴みの影を食べるにしては、あまりに大きいからだった。

少年は影と握手をしたまま、いつ手を離していいのかわからず、握ったまま考えていた。手のひらが汗で湿ると、クロのひからびた手が温かく感じる。

唐突にクロが身体を震わせたので、怜は驚いて手を離した。クロはさざ波のように畳を滑り、網戸へ体当たりをすると、来たときと同じように縦に縮んで通り抜け、外に吸い込まれていった。突然のことに、怜はしばらく立すくんでいた。先ほどまでクロの居た場所には黒い染みのようなものが残っていたが、蛍光灯の光にあぶり出されて、すぐに消え去った。

怜が祖母を振り返ったのと、チャイムが鳴ったのはほぼ同時だった。

「そうだった」

と祖母はつぶやいた。

「今日はお客さんがくる日だったのを忘れてたわ」
　怜は時計を見た。短針は八を少しすぎたところを指している。
「こんな時間にくるの？」
「うちには、夜遅くにくるのが多いのさ」
　祖母はほのかな笑みを浮かべた。机を杖によろめきながら立ち上がると、
「怜ちゃん、悪いんだけど、お客さんをここに連れてきてくれないかな。お婆ちゃんは品物を持ってくるから」
　と、怜の返事を待たずに廊下に出ていってしまった。
　再びチャイムが鳴った。怜はドキドキしながら玄関へ向かう。廊下にはシロが寝息を立てていた。
「シロ、シロ」
　怜が声をかけると、めんどうくさそうにシロのまぶたが開いた。
「お客さんがきてるよ」
　廊下からは玄関が見える。玄関先の電球に照らし出されて、曇りガラスの戸には影が映り込んでいる。その影の手が音もなく上がり、控え目に戸を叩いた。コンコン。
「すいませーん。ミサキですがー」
　男の声だった。その声を聞いて、怜はなぜかほっとした。忍び歩きで戸に近寄ると、慎重に戸を開けた。
　顔を覗かせた男性は、怜を見て「あれ」とつぶやいた。そして柔和な笑顔を浮かべると、
「お婆ちゃんは？」
　と言った。
　若い男性だった。大人には違いない。短髪がよく似合っている。シャツにジーパンで、サンダルを履いていた。
「お婆ちゃんは、今取りにいってる……」
　ふうん、と男性は言いながら、興味深げに怜を見つめた。屈んで怜と同じ目線になった。怜は両手を硬く握り、目をそらした。
「ボク、お名前は？」

「怜だよ……」
「いくつ？」
「十才……」
あはは、と男性が笑うので、怜は驚いて彼を見つめた。
「若いなぁ。僕はミサキって言うんだ。よろしくね」
「うん」
ミサキは人良さそうな青年に見えた。祖母のような微妙なイントネーションの違いはなく、怜側の人物でいるように思われた。
「夏休みで遊びにきたの？」
「うん」
「ここは楽しい？」
怜はこの問いかけに頭をひねった。楽しいのだろうか？
「わかんない……今日きたばっかりだから」
「ああ、そうなんだ。慣れるといいね。あと少しでお祭もあるから、きっと楽しめると思うよ。僕が主役をやるから、見にきてね」
「どんなお祭なの？」
「とても美しいお祭だよ。夜にね、火を焚くんだ。山から町中をずうっと通って、神社に行くんだよ。神様を山から神社に招待するんだ」
「神様なんていないでしょ。なのになんでやるの？」
ミサキは軽い声を立てて笑った。
「そうだね。どうしてやるんだろうね。なんでだと思う？」
怜は首をかしげた。神様もサンタクロースもいないことは当の昔からわかっていることだった。その一方で、幽霊はいると思っていた。どの学校にも一匹や二匹はいるものだ。見たことはないが、見たという人は少なくない。それについ先ほど、怜自身もクロを目にしている。ただ、幽霊は神様ではない。そのくらいの区別は怜にもわかる。だから神様を迎え入れるという話には首をかしげざるを得なかった。
「わかんない」

「まあ、難しいからね」
「わかるの？」
ミサキは笑みを浮かべながら頬をかいた。
「わかるといえばわかるし、わからないといえばわからない、かな」
「なにそれ？」
「僕くらいの年になると、いろいろ思うところも多くて、あやふやになるんだよ。はっきりしたくないって感じかな」
ふうん、と怜はわかったように大仰にうなずいてみせた。
「大変なんだね。僕のお母さんも、たまに似たようなことをいうときあるよ」
「そうなの？」
「うん。そのほうが、いろいろと都合がいいんだってさ」
「へえ」
驚いたようにミサキは目を見開いたが、それが演技であることを怜は察した。
そのとき後ろから声がした。振り返ると、祖母が小箱を手に廊下を歩いてくるところだった。
「怜ちゃん。友達になれた？」
「友達？」
怜はそう言ってから、ミサキの顔をとっくりと眺めた。そして彼に向かって、
「友達？」
と繰り返した。
「君さえよければ、友達にならせてもらえるかな」
青年は微笑んだ。
「友達になるには、握手をするんだよ」
不意に思いついたことを怜が言うと、ミサキは「ほう」とつぶやいてから、手を差し出した。
「じゃあ、握手をしよう」
怜は相手の手を握り締めた。細い外見とは打って変わって、しっ

かりとした大きな手だった。しかし握り方は優しく、むしろ弱々しく感じるほどだった。握手が終わると、待ち構えていた祖母が口を開いた。

「じゃあ、これが頼まれていたものね」

小箱を差し出す。ミサキはポケットからむき出しのシワクチャになった紙幣を取り出すと、小箱と交換に数枚を祖母に渡した。怜が好奇心を秘めた目で小箱を見つめていると、ミサキは開けてみせてくれた。

中には石が入っていた。ただの石ではなく、鉱石だった。理科の教科書で似たようなものを写真で見たことがある。ゴツゴツとした表面には、ウロコ状のとろけるような青色が広がっている。

「瑠璃だよ」

青年は石をつまんで取り出すと、玄関先の裸電球に照らしてみせてから、怜に渡した。

瑠璃は冷たく、重かった。石を持つ経験が少なかった怜は、手のひらに乗せたままどうしたらいいのかわからず、目の高さまで持ち上げてあちこちから観察した。

専門家から見れば、違った感想を持ったのかもしれないが、怜はこの色つき石にさほど興味をひかれなかった。石に青いペンキをつければ、似たようなものが作れそうな気がした。

「これをどうするの？」

怜の様子を見て、ミサキはわずかに落胆したように見えた。それはほんの一瞬だけだったが、怜は全身から汗が沸き出すのを感じた。ミサキは瑠璃を小箱に戻しながら、うーんとうなった。

「これは、なにかするためのものじゃないんだよ。宝物だからね」

「宝物……」

「ほら、ドラゴンは宝石とかたくさん溜め込むでしょ。でもドラゴンは街で買い物をするわけではないから、たくさん持っていても仕方がない。なのに集めてしまう。これが宝物さ」

「どうして使えないのに集めるの？　意味ないじゃん」

「使えないことに意味があるのさ。ずっと残れば、自分がいた証拠になるからね」
「証拠なんて残して、どうするの？」
「その人を思い出すときの鍵になるんだよ。僕はそうやって残った証拠をたくさん持ってるんだ。ずっと年を取ったあとも、相手の残した宝物を見ると、ああ、あれはああいう奴だったなあ、って思い出すことができるんだ」
「ふうん。それで今のうちから、宝物を集めてるんだ」
「そういうこと。そのうち君にも、僕の宝物をあげるよ。忘れないようにね」
「じゃあ、その石がいい」
「これ？」
ミサキは小箱を軽く振った。中でカラカラと音がする。
「いいよ。そのときになったら、これをあげよう」
「なんで今じゃないの？」
ミサキは困ったような苦笑いを浮かべると、箱をしげしげと眺めながら、
「確かにこれは今僕が買ったものだけど、まだ僕のものにはなってないからだよ。それに、欲しくて買ったのにすぐ君にあげるなんて、僕が嫌だ」
「なんで欲しかったの？」
「君はなんでも知りたがるんだなぁ」
疲れたような声をミサキは出した。
「好奇心旺盛なのよ」
祖母が助け船を出すと、ミサキはうなずいた。
「最近の子どもは、なんでも達観してるのかと思ってましたよ」
「今日はわからないことがたくさんあったからね。ね、怜ちゃん」
怜はなにも応えず、鼻をすすって意志を表した。ミサキは小箱をカバンにしまいながら、
「それでは、そろそろ帰らないと」

と言ってから、怜を見下ろした。
「もし明日も知りたい病が治ってなかったら、夕方にでも僕のところにくれば見せてあげるよ」
「なんで夕方なの？」
「僕には夏休みがないからね」笑いながら「仕事があるのさ」
「わかった」
ミサキは今度は祖母へと視線をずらして、軽く頭を下げた。
「それでは、また来ます」
「気をつけてね」
怜とミサキは手を振ってわかれた。外はもう真っ暗だった。怜は暗闇に目が慣れず、ミサキの姿は瞬く間に闇に飲まれた。見上げると、星々が輝いている。一瞬だけ怜は、この夜空は作り物なのではないかと疑った。教科書に出てくるような美しい星だった。しかしあくまで写真の話であり、実際にそれを見たことは一度もなかった。
怜は、自分が寂しい人生を送っていると思ったことは一度もない。得られる情報は全て得ることができる。しかしそれに実感が伴っていないだけのことだ。少年の心には物足りなさで充ちていた。なにか興味を引くものを求めていた。怜は飽きることなく星空を眺めた。祖母が心配になって迎えにくるまで。蟻の行列を見ているかのように。

3

怜は夜がこれほど暗いものだとは知らなかった。頼りないと思っていた電球が消されると、なんと頼り甲斐があったのだろうと思い直さざるを得ない。一切の光がなくなった室内は、押しつぶされそうなほどの濃厚な闇が詰まっていた。

マンションにいたときは、闇夜はさほど脅威ではなかった。全ての明かりを消し去っても、まだ明るかった。もちろんそのときは、それが深闇だと思っていた。アニメではどんなに暗くても人は見えていたし、映画でもそうだった。しかし今はどうだろう。なにも見えない。どんなに近付けても手すら見えず、ただ息の反射からあるのだろうとしか感じられない。目をつむっているのか開いているのか、ふとすれば忘れてしまう。

車の音はなく、虫の合奏に合わせて風が障子を揺らし、部屋のあちこちから陳腐で小さな太鼓を鳴らすような家鳴りがする。なにかいるのだろうか、と怜は不安になった。今にも虫たちが家に上がり込み、怜たちを捕まえてしまうのではないかと思えてくる。虫の音は遠くでジリジリとして一瞬止んだかと思うと、突然間近で鳴り始めるようなこともあり、怜は眠るどころではなかった。目を開けても、相変わらずなにも見えず、頭がぐるぐると回って泣きそうになった。

そのとき、闇の中でなにかが起き上がり、のんきなあくび声をあげた。シロだ、と怜は直感した。シロは爪音を立てながら怜の脇までくると、ぶっきらぼうに横たわり――半ば怜にタックルするように倒れたので、少年はうなった――大きくため息をついた。見えなくとも、体温が伝わってくる。手を伸ばして皮膚に触れると、手のひらから恐ろしさが抜出していくように感じた。相変わらず虫や家は鳴り止んではいなかったが、もはや遠い出来事のようになっていた。それで怜はいくぶん冷静になり、考える余裕ができた。この古

い日本家屋で覚えていることを掘り返し、自分と母親の住む環境とどの程度違うかを精査した。

入り口がたくさんあることは、ちょっとした驚きだった。マンションでは入り口はひとつしかない。しかしここでは、窓も入り口の役目を果たすのだ。だからクロのようなものも、窓から上がり込んでくる。恐らく虫たちもそうなのだろう。

建物はボロすぎるし、ドアは貧相な鍵しかついていない。防犯がまったくなっておらず、物もなにもなく、無駄に広い。隙間から風が吹き込み、どこからともかく虫が入り込み、天井はきしみ今にも崩れ落ちそうだし、木の板ははじめて訪れた訪問者を注意深く見つめている。

親の事情とはいえ、このような場所に連れてこられたことを怜は残念に思っていた。自分はこれまで大人しく親の言うことに従ってきたつもりであった。なにが足りなかったのだろうか。シロは暖かかった。夏に不釣り合いなほど怜は震えていた。シロを抱き寄せると、涙がこぼれてきた。祖母に悟られないよう押し殺して泣いた。やがて泣きつかれると、暖かさに促されて意識が遠のいていく。現実と夢との境界線で、シロが怜に話しかけてくる声を耳にした。しかしシロがなにを言っているのか、怜が理解する前に、夢の世界へと踏み込んでしまっていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2427f/

くろしろ

2010年10月11日22時54分発行